

# 黎明期の日本人米国留学生

——日下部太郎をめぐる——

高 木 不 二

## はじめに

日下部太郎はその出身地である福井をのぞけば国内ではほとんど無名の存在であるが、アメリカの東海岸にすむ日本人にとってはかなり知られた存在である。異国にあって常にみずからのアイデンティティーを確認しつづける必要のある人々にとって、最初にアメリカの大学を卒業したとされ、アメリカでなくなった日下部の存在は、自分たちの誇れる先達として本国に暮らす人々の想像を超えて、大きな意味をもっている。

しかしその日下部太郎について正確に知られていることは意外に少ない。日下部太郎については、もと福井市長で歴史家の永井環氏による伝記が、通説を形成してきたといつてよかろう。その後福井において研究や考証が積み重ねられてはいるが、その国を超えた存在意義とは裏腹に、アメリカでの調査は十分ではなく、全体として「福井からみた日下部太郎」という像を抜け出していないという印象をうける<sup>(1)</sup>。

幸い筆者は2002年から2003年にかけて日下部太郎の留学先のラトガース大学でグリフィス・コレクションや大学史の史料調査を行う機会にめぐまれたので、そこで入手した若干の新史料をもとに、日下部太郎をその周辺の光景をふくめて描く試みをはじめてみたい。もとより不十分なものであるが、今後の日米交流史研究の進展に少しでも寄与できれば幸いである。

## 1 渡米までの日下部太郎について

日下部太郎は弘化2年(1845)年、福井城下江戸町に生まれた。父は八木郡右衛門、家禄150石御先物頭や御使番をつとめる大御番士であった<sup>(2)</sup>。日下部太郎とは渡米に際してつけた姓名であり、もともとの苗字は八木(やぎ)、名乗は陸肥(ちかとも)、通称は八十八(やそはち)であった。八は末広がり縁起が良いとされていたので、八木八十八はこの八を三つも含む名前をつけられたことになる。八木家の長男として将来を嘱望されていたことがうかがえる。ちなみに八木を上下にくっつけて書くと米という字になり、八十八も同様に米という字になる。八木八十八は米が重なる名前という意味でも、米社会の江戸時代において格別めでたい名であった。後年彼が親しい友人からの手紙の宛名に「米米」賢兄などと記されるのも、ここに由来する<sup>(3)</sup>。

八木八十八は13歳で藩校明道館に入学し、儒学を中心とする教育を受け、慶応元年(1865)21歳のとき洋学修行のため長崎遊学を命じられた。彼が学んだ済美館は幕府が安政五年(1858)に設けた英語伝習所の流れをくむもので、当時八十八はここで宣教師フルベッキなどから英語をはじめとする洋学を学んでいた。フルベッキの日下部に対する評価は高く、彼ほど明敏な日本人は数少ないと述べている<sup>(4)</sup>。またここには肥後藩士で越前藩に賓師として招かれたこともある思想家横井小

楠の甥にあたる横井左平太・大平兄弟も学んでおり、やがて彼らは相ついでアメリカに「直伝習」に向かうことになる。日下部が渡米を志すにいたった経緯は不明だが、横井兄弟とのつながりが大きな影響をもった可能性がある。

なお当時長崎はアジアを介して西洋に通じる文化的先進地域であり、江戸に近い横浜より開放的な雰囲気の中で外国語や外国文化に接することができる場所であった。熊本には横井左平太・大平兄弟と、橋本左内の実弟に当たる綱常や、陸奥宗光と一緒に写っている写真が残されており<sup>(5)</sup>、八十八もいろいろな人物と接触し、見聞を広げていたことが推察できる。

この時期の八十八は、単に学問をするだけでなく、長崎で知りうる外国や諸藩の情報を収集する役目も負っていたらしい。慶応2年7月ごろ彼が当時藩政の主導権を握っていた前越前藩主松平春嶽の左右に差し出した報告書が『続再夢紀事』に載っている<sup>(6)</sup>。それには6月段階でのイギリス公使パークスの動静や、それに関するフルベッキの意見が記され、そのほかにも薩摩藩がフランス公使に接触したこと、長州と薩摩が密接な関係を持ち、長州船が長崎に入港するときは薩摩の国旗をかかげていることなどを伝えている。また薩摩の五代友厚とは直接の交流があったようで、五代から得た情報をもとに薩摩の国論や幕府の海外における最新の動静を報じている。長崎にあって八十八は、もはや日本の将来が世界の動きのなかで決まることを実感していたであろうことは間違いないところである。

八十八は慶応3年2月13日アメリカに向けて長崎を出航した。すでに横井兄弟は前年の4月に幕府の管轄下にあった済美館での学習に見切りをつけ、横井小楠の援助を受け、密航のかたちでアメリカに向かっていた。彼らはフルベッキの紹介状をもち、ニューヨークのオランダ改革派教会事務所でも主事のフェリス (J.M.Ferris) に会い、その勧めでニュージャージー州のラトガースカレッジ付属予備校とも言うべきグラマースクールに通っていた。彼らは渡米の目的はイギリスやフランスの軍艦に対抗できる軍艦を作りたいとフェリスに語ったというが<sup>(7)</sup>、アメリカは彼らの養父となっていた小楠が「善」の国として高い評価を下していた国であった。日下部太郎と名を変えた八十八がイギリスやフランスではなくアメリカに向かったのは、アメリカとかかわりの深いフルベッキの仲介と、横井兄弟との合流が前提であったのではなかろうか。

ちなみにフルベッキ (G.F.Verbeck) はオランダ生まれで、アメリカのオランダ改革派教会から派遣された宣教師であるが、国籍は無く、やがて明治に入って日本政府からその貢献が評価され、特別のパスポートを発給されるという人物である<sup>(8)</sup>。

日下部太郎は横井兄弟とは違い、越前藩の公式留学生として、藩費が支給され、幕府 (長崎外国事務局) が発給した3年間の期限付きパスポートをもつての留学であった。ただ現在と違って、パスポートは必ずしも大きな意味を持つものではなかったことを、頭に入れておくべきである。前述のようにフルベッキはパスポートなしで日本にやってきていたし、横井兄弟もパスポートなしでアメリカに入国している時代なのである。世界的にみて近代国家の集合体としてのヨーロッパの国際秩序は、日本もふくめてまだ世界に十分浸透してはいなかったのである。

パスポートといっても、日下部太郎のものをみると「海外渡航免許状」という1枚の紙切れにすぎない。写真はなく、身長「5尺3寸5分 (162センチ)」（ほぼ当時の日本人の平均身長)「口大ナル方」などと体の特徴が記されている<sup>(9)</sup>。

## 2 ラトガースでの留學生活の開始

日下部がジャワ経由でニューヨークについたのは慶応3年7月13日 (1867年8月12日)。ジャ

ワ経由ということは、ケープタウンまわりのオランダ船を利用した可能性も考えられる。ニューヨークからは、やはりフェリスの案内をえてニューブランズウィックに入ったようだ<sup>(10)</sup>。いうまでもなく、オランダ改革派教会系列のニューブランズウィック神学校と不可分の関係にあったラトガースカレッジ (Rutgers College) で学ぶためである。逗留先は横井兄弟がいた、チャーチストリート62にあったヴァン・アースデール (Van Arsdale) 夫人の経営する下宿であった。

横井兄弟のときはこの下宿に落ち着くまで、一方ならぬ苦勞があった。当時アメリカ東海岸には東洋人の姿は珍しく、偏見も少なくなかった。野蛮な異教徒に夜殺されるかもしれないと、下宿の使用人たちが彼らの受け入れを拒み、なかなか下宿先がみつからなかったという。ヴァン・アースデール夫人が、その宗教的情熱から彼らを改宗させる意向をもって、勇敢にも受け入れてくれたのである。

夫人は彼らに同行したフェリスにこう申し出た<sup>(11)</sup>。

2人を受け入れましょう。そのためにもし使用人や他の下宿人が逃げ出し、いなくなってもかまいません。二人の来訪は、日本の人々にキリストの福音を伝えるための良いチャンスと考えましょう。

なおラトガースカレッジには当時寄宿舎はなく、遠隔地の学生のために何軒かの下宿先が指定され、そこでの厳格な家庭教育が期待されていた。

日下部太郎は入国1ヶ月後の9月新学期からラトガースカレッジのサード・イヤー (1年) に籍をおいたことが確認できる<sup>(12)</sup>。横井兄弟がグラマースクールに学んでいる中で、なぜ彼がいきなりカレッジに入学できたのかはよくわからない。公式留学生という身分上・経済上の問題と、英語力に差があったことが考えられるところである。

なお福井ではまずグラマースクールに彼は入り、カレッジには2年から編入したというのが通説化しているが、これは事実と異なる。ちなみに、通説のように1年間グラマースクールに学び、4年制の学部で2年から編入したとしても、彼が死んだ1970年までの2年間の在学では、名目的にせよ卒業することは飛び級でもしないかぎり不可能である。

彼の選んだカレッジでのコースは、実は後にお雇い外国人として福井にやってくるグリフィス (W.E.Griffis) などが学んだ伝統的な古典学部 (Classical Department) ではなく、新設されたばかりの科学学部 (Scientific Department) であった<sup>(13)</sup>。これは実務的な色彩の強いコースで、土木工学・機械コースと化学・農業コースをふくむもので、しかも3年間の速習コースであった。日本人留学生が求めていたものは、短期間に役に立つ実学であったから、このコースはその要望に合致するものであった。

ここで、この時期のアメリカの歴史状況と、大学が置かれていた状況について少し述べておきたい。日下部太郎が渡米したのは南北戦争 (1861-65) が終わった直後のアメリカであった。グリフィスが北軍に参加し、戦後ラトガースに入学したのは2年前のことであった。南北戦争は南部には荒廃をもたらしたが、北部にはむしろ未来への勇気と活気をもたらし、アメリカは独立国として政治的のみならず経済的にも一体化した方向にむかうことになった。それはいわゆる西部をまきこみつつ、「金ぴか」時代とよばれる爆発的な工業化と都市化がすすむ時代への幕開けであった。ニューブランズウィックにもこうした波は押し寄せつつあり、かつてのラリタン河畔の商業都市から、全米一の大都市ニューヨークの外郭に位置する工業都市への変貌が顕著に見られた。鉄道と運河の建設がこれを促したことはいうまでもない。1870年人口は15059人、戸数3155、32の工場と1578

人の労働者を擁する都市になっていた<sup>(14)</sup>。当時の街の絵をみると、ラリタン河を越えて鉄道が走り、河に沿って掘られた運河には蒸気船が浮かび、その沿岸には大きな工場が黒煙を吐き、市内には立派な教会や邸宅がたちならぶ、まがうことなき「Large City」の様子を鳥瞰することができる。ニューブランズウィックは決して、現在の様子からイメージしがちな、静かな学園都市ではなかったのである。

大学も変化を求められていた時代であった。かつての少数者のための宗教的な色彩の強い大学ではなく、開かれた市民のための大学への要求が強まっていた。特に科学教育の整備に対する要望が政府からも求められ、ラトガースでも農業および機械技術を振興するための州立カレッジの設立奨励法にもとづいて<sup>(15)</sup>、1865年9月には科学学校（Scientific School）が新たに設けられるにいたっていた。これは1868年には科学学部として、古典学部と並立する形で正式にカレッジに組み込まれる。日下部太郎が学んだのは、この学部（1年次は科学学校）であった。

ちなみに、1868年から69年にかけての学年の在学人数は、古典学部95人（1年22人、2年26人、3年29人、4年18人）、科学学部47人（1年17人、2年14人、3年17人）、ラトガースカレッジ総計で142人であった。この中に日本人は4人確認できる。2年に日下部、1年に後述する薩摩藩留学生3名が登録されている。いずれも科学学部に籍を置いている。このとき、後に福井にいついで来ることになるグリフィスとワイコフ（M.N.Wyckoff）はそれぞれ古典学部の4年と1年に在籍していた<sup>(16)</sup>。念のため付言すれば、山下英一氏はグリフィスが「理化学コース」に籍を置いていたとされるが、これは誤りである<sup>(17)</sup>。

### 3 日下部太郎の学生生活

日下部のアメリカにおける日常生活は、残念ながら日記が焼失し、それに代わる史料が残されていないため十分に知ることはできないが、カレッジの規約からその学生生活の一端を想像することができるので、以下ラトガースカレッジの学則を紹介することにしよう<sup>(18)</sup>。

まず日課。平日の場合、朝8時20分からカレッジ内の教会で朝の礼拝がおこなわれる。授業は朝9時から1時まで。テキスト（ラテン語・ギリシャ語もふくむと思われる）の暗誦などの家庭学習も毎日課されていて、それは翌日の授業中に必ずチェックされ、採点された。

安息日には9時半から聖書の朗読があり、かならず出席しなければならない。その後午後あるいは夕方にも、両親または保護者のきめた教会で、おおやけの礼拝に出席しなければならない。日下部の場合は、下宿のすぐ近くの、改革派教会（ジョージストリートとオルバニーストリートの交わる北東がわ）に出席した。

また学期中は学長の許可なく市を出てはならず、バーや酒場、ビリヤード場への出入りは禁止されていた。自分の部屋に銃や酒、ゲームなどを持ち込むことも禁止されていた。原則としてかなりきびしい禁欲的な生活が求められていたことは、他の多くのアメリカの大学と同様であった。

学年暦は日下部が2年次のもの（1868-69）をみると、次のようになっていた。

9月22日 第一セッション開始、12月23日 終了、冬季休暇へ。1869年1月7日第2セッション開始、4月7日終了。4月15日 第3セッション開始、6月23日卒業式、9月20日まで卒業休暇（夏休み）。これをみると、9月はじまりで、年3学期（セッション）制をとっていたことがわかる。

入学試験は6月と9月に学長室でおこなわれ、試験科目は、1算数 2数学（2次方程式まで）、3平面幾何学 4英文法（スペリングを含む） 5人文地理 6自然地理。受験に際してはグラマー

スクール校長などの推薦状が必要だったようで、ラトガースカレッジ・グラマースクールの場合、ラテン語が一定のレベルに達していることがその条件になっている。日下部の場合、こうした入学条件をすべて満たしていたと考えることは難しいが、公式留学生ということでなんらかの特例措置がとられた可能性がある。

なお、正規のカレッジ授業とは別に、日下部がグリフィスからラテン語を習ったことが、グリフィスの日記から確認できる。1968年10月30日の項である<sup>(19)</sup>。

グラマースクールで9時45分から10時45分まで神話学を、10時45分から11時45分まで応用科学を教える。昼食後日下部にラテン語を教える。

これをみると日下部はカレッジ入学後に、グラマースクールにおいてグリフィスから特別の個人レッスンを受けていたものと思われる。

各期末には各科目について試験がおこなわれ、50パーセントが合格ラインとして設定され、そこに達しない場合は個人授業などがおこなわれたが、すべての科目について欠点をとった場合は退学となった。

また欠席や規律違反については、一回ごとに記録され、それら罰点があわせて8回に達すると保護者に通知され、さらに16回になると2度目の通知が出されるとともに学長から注意を与えられ、さらに24回にいたると退学とされた。きびしい出席・学業管理がなされていたことがわかる。日下部の場合、下宿だったのでこうした連絡は、すべて下宿先のヴァン・アースデール夫人のもとに行くことになっていたものと思われる。

次に、各学年での履修科目についてみていきたい。履修科目は各学期ごとに、学部・コースによって定められていたが、日下部がとったと思われる科学学部の土木工学・機械コース(Civil Engineering and Mechanics)の場合は以下のとおりである<sup>(20)</sup>。

1年生・・・数学(代数・幾何)、建築設計、生理学、動物学、植物学、化学、歴史、心理哲学、フランス語、作文と朗読演習、

2年生・・・数学(代数・幾何)、設計、物理学、化学、鉱物学、機械学、歴史、心理哲学、ドイツ語、

3年生・・・測地および天文学実習、地質学、建築学、機械学、土木工学、軍事工学、政治経済、倫理哲学、憲法

授業での学習のみならず、家庭学習(暗誦)は常時課されており、また3年間をつうじて士官の指導のもとに軍事訓練もおこなわれていた。卒業試験においては、全員科学にかんするテーマについて書いた論文を評議員の前で発表することが求められ、その写しが図書館に入れられることになっていた。日下部の場合、このほかに少なくとも1年次にはグリフィスによるラテン語の個人授業が加わっていたことは、前述のとおりである。

全体的にみて、かなり幅広く、また高度な専門知識を学ぶことが課されていたことがうかがえる。長崎の済美館で基礎的な勉強をただけ(英語のほか世界史・数学・物理・経済・フランス語・ドイツ語などの講座が一応設けられていたが、どの科目を日下部がとったかは確認できない)の日本人留学生にとって、日々の学業をこなすだけでも容易でなかったことは十分察することができる。

ただしこの時期の学生がすべてカレッジ側の意向に忠実で、一心不乱に勉学に励んでいたとは考えないほうが良いようだ。教師にいたずらをしかけ、町の教会に女性を同伴するなど、大学教員の頭を悩ませる事件はめずらしくなかった。スポーツも盛んであり、1866年には野球で初の対外試

合がプリンストン大学とのあいだに行われ、1869年にはアメリカで最初といわれる歴史的なフットボールの試合が、やはりプリンストンとの間におこなわれている。文化活動の面でも、literary society という文化団体（おもに演説を主催した）が学生の自主組織として形成され、1867年には大学新聞“TARGUM”が創刊されるなど、学生活動は従来になく活発化していた<sup>(21)</sup>。日下部ら日本人留学生も、同年代の者としてこうした大学の新しい息吹を少なからず感じていたにちがいない。

夏休みは、彼らにも開放的な時間を与え、彼らはそれなりに休暇を楽しんだようだ。現在残っている日下部直筆の滞米中唯一の資料である1869年7月9日づけのヴァン・アースデール夫人あての書簡をみると、すでに体をむしばまれながらも、静養をかねて休暇を楽しむ様子がかがえる<sup>(22)</sup>。

親愛なるヴァン・アースデール夫人

この火曜日に無事こちらに到着し、こちらでの生活を楽しんでいることをご報告できますことをうれしく思います。1週間前の火曜日にニューヨークを立ち、次の日の夜ナイアガラの滝に着き、そこから汽船に乗ってサウザンドアイランドやラピッズをへてモントリオールに着きました。セントローレンス河の航行はすばらしく、十分船旅を満喫しました。私たちは土曜の夕方にキースビルに入り、月曜の夜まで滞在しました。ロメイン医師は大変親切で、興味深いところや機械工場などを、くまなく案内して下さいます。夏を過ごすにはとても良いところと思います。

ここにきてから気分はとても良くなり、非常に気に入っています。ここには8・9人の寄宿生がいますが、私たちは、毎日ボートを漕いだり、魚を釣ったり、クローケー（ゲートボールのような遊び—高木）をしたりして楽しんでいます。あと5・6週間はここにいたいと思います。

私あてのものを何か受け取りましたら、下記のアドレスまでお送りください。

c/o Allen Sheldan,  
East Lake George  
Queesvury Warren Co.

ご家族によろしくお伝えください。

敬具

日下部太郎

この手紙は高木（三郎）氏にお送りください。

おそらく改革派教会のメンバーが連絡をとりあって、彼の病状回復をはかるべく、ニューヨーク北方の景勝地レイクジョージでの静養をすすめたのであろう。しかし、病状は思わしくなく、ほどなく彼はニューヨークにもどったらしい。当時ニューヨーク州のストーンリッジにいた同僚の左平太が同年8月25日づけでヴァン・アースデール夫人にあてた手紙には、次のような一節がある<sup>(23)</sup>。

数週間前に日下部から手紙を受け取りました。彼の健康状態は決して良くはなく、レイクジョージには長くいられなかったようです。ニューヨークにもどり、現在はフラットブッシュ・アカデミーにいます。いまはそこが良いと思います。

この後最終学年の9月新学期がはじまるが、すでに日下部の体は厳しい勉学にたえるものではなくなっていたのである。

薩摩藩の留学生杉浦弘藏（畠山義成）が10月9日づけで同郷の永井五百助（吉田清成）に書き送った手紙には「日下部生には弱体保養の故を以て Millstone へ転宿、毎日懸けて爰許え来校」と書かれている<sup>(24)</sup>。ミルストーン（Millstone）はニューブランズウィック西方のラリタン運河をややさかのぼった地点にある小さな町である。独立戦争時ニューブランズウィックがイギリス軍に占領されたときに、ラトガースカレッジが一時ここに移されたことがあるほど、改革派教会にゆかりの深い土地であった。教会関係者の保護・看病をうけやすかったのであろう。ここから毎日カレッジに通っているというのである。この手紙によれば、少なくとも最終学年の第1セッションには、日下部は無理をおしてカレッジに通っていたことは確かである。

しかし、この1869年12月には日下部はカレッジの籍を外れたとグリフィスは *The Rutgers Graduates in Japan* に記している。とすれば第2セッションから日下部は休学したのであろうか。

#### 4 日下部太郎の死

年がかわっても日下部太郎の病状は快方に向かわなかった。1870年4月3日の吉田清成宛畠山義成書簡には日下部の様子が次のように記されている<sup>(25)</sup>。

日下部生には追々病体に相成居候処、就中近比に到り愈々病弱、丁度沼川（横井大平）之有様に少は似掛り、Dr.Baldwin 之説に、必ず我国え帰帆養生可致との事にて、当分同生には僕之所え滞宿相成候まゝ、精々保養方尽力仕候。尤も快気次第には可成速に新約克え出府、船出之用意夫より大凡そ来る十七日比同府出立、大平蒸車え旅行の賦りに予しめ相定り候間、為御心得此段早々御知らせ申上候。

これによれば医師のボードウィンが日下部に帰国をすすめ、その準備にむけて日下部はニューブランズウィックの畠山の下宿に移り、4月17日にはニューヨーク経由で帰国する手はずになっていた。しかしその日を待たず、日下部太郎はこの世を去った。グリフィスの日記によれば、日下部の死亡した日時は、1870年4月13日（金）午後12時30分（20か、判読不能）となっている。

葬儀は15日の午後行われた。葬儀の様子は、福井県立図書館の館長もつとめられた杉原丈夫氏の論考に詳しい<sup>(26)</sup>。

ラトガースカレッジの教授・学生それにグラマースクールの学生が、行列をつくって学校を出発し、日下部の遺体が置かれている下宿まで行進した。家での儀式のあと、棺を車に載せ、ふたたび行列をくんで教会に向かった。棺は同級生8人が運んだ。

教会の儀式はニューヨークからフェリスがきて、総司会者になった。まずコーラスがあつて、フェリスが聖書の詩篇90番第2節を唱え、次いで前グラマースクール校長のマッケルベイによる祈祷が行われ、カレッジ学長キャンベルが弔辞を述べた。つづいて賛美歌のなか大勢の人が遺体との別れをすませると、棺とともに墓地にむかった。教会から程遠からぬウィロウグローブ・セメタリーである。行列の順序は、まず聖職者、次にカレッジの教職者、棺の付き添い人、棺、日本人学生、カレッジ同級生、一般の学生、最後に一般の参列者である。グリフィスが参列したことは言うまでもない。

式次第はきわめて丁寧なもので、改革派教会とラトガースカレッジ、グラマースクール三者の合同葬の観を呈している。これから杉原氏は日下部がキリスト教に入信していたと推測しておられるが、これまで述べた日下部を取り巻く環境や人間関係からして葬儀形式はそれなりに首肯しうるも

のであり、必ずしも入信を想定する必要はない。実際、後述するグリフィスの回想によれば、彼は死の床において入信を拒んだという。ちなみに、横井左平太・大平兄弟も入信していない。

墓碑が建てられたのちの10月の学生新聞“TARGUM”紙には、次のような記事が掲載された。

#### THE STRANGER'S GRAVE

この4月ニューブランズウィックで亡くなった日本人留學生日下部太郎の遺体は、この地に埋葬され、土に返ろうとしている。仲間の留學生が遺体のあつかいについて両親に問い合わせたところ、この市に埋葬されるべきとのことであった。彼ら留學生は喜んでその意向を受け入れ、ジョージストリートの墓地のかれの埋葬場所に1つのモニュメントを建てた。モニュメントは白の大理石風の石の台座に、8フィートほどの高さの、4面が削られた塔である。表と裏の2面には漢字で故人の名前、死亡年月日、故郷の地名が彫りこまれている。台座の1面には、英文でこう書かれている。

TARO KUSAKABE,

A native of Achizen, Japan, Died April 13, 1870

Aged 25 years.

他の面にはこうある。

“A Student in Rutgers College, and a Member  
of Phi Beta Kappa.”

日下部は福井市に生まれた。福井は大きな街で、越前の国の首都であり、日本の西海岸の近くにある。彼は生前ファイ・ベータ・カッパ会員にはなっていなかったが、ラトガースカレッジとしては、彼の人物・成績を評価し、友愛の情から、会員の証であるゴールドキーに彼の名前を彫りこんで、家族に贈ることを満場一致で可決した。票決の証明書と成績表もそれに添えられる。

日下部太郎の死亡記事に関して、グリフィスはこう書いている。

彼の死亡記事をターグム紙に書きましたが、日本の新聞にその訳が出ました。その記事はまたインディペンデント紙にもりました。<sup>(27)</sup>

ほかに該当する記事が見当たらないので、上記の記事はグリフィスのものではなかろうか。

なおここでΦBK（ファイベータカッパ）協会について言及しておく。この協会はアメリカでもっとも古い歴史をもつ、フラタニティー（学生結社）である。その起源は1776年ヴァージニアのウィリアムアンドメリー大学で生まれた学生の秘密組織に発し、その後全米に広がった。その目的は高いモラルと教養に貢献するところにおかれ、学部3・4年生で優秀な成績を修めたものが推薦された。その意図は、会員に与えられるゴールドキーにきざまれているΦBKの文字が、ギリシャ語Philosophia Biou Kubernetesのかしら文字をとったものであり、これが“love of wisdom—the guide of life”「学問への愛—人生の導き手—」を意味するものであることから察することができる。この協会は現在でも活動しており、本部はワシントンに置かれ、7地区、262の大学に支部をもち、毎年15000人をこえる新メンバーが選出されている。ラトガースに支部がもうけられたのは1869年のことである。グリフィスがこの第1回の会員の一人に選ばれていたことは知られているが、翌年日下部が選ばれたときグリフィスは卒業生としてラトガースカレッジΦBK協会の副会長（会長はD・マーレー）を務めていたことは記憶さるべきであろう。彼が、日下部に個人指導をおこないその人物を良く知るものとして、日下部を推薦したことは十分考えられるところである。



なおラトガス・カレッジにおいてこの年日下部と同時に会員に選出されたものがほかに8人いたが、日下部太郎が日本人としての最初の会員であることは言うまでもない<sup>(28)</sup>。

翌年グリフィスが福井に来て、日下部の父親にΦBK協会のゴールドキーを渡したときの日記の記述は印象的である<sup>(29)</sup>。

日下部の父は表門からではなく裏門から入ってきた。・・・五十歳くらいの悲しげな表情の男が入ってきた。その妻は息子が異国で外国人として死んだことを知って悲しみのあまり死んだ。・・・父は1人さびしく家に取り残されてしまった。私はラトガス大学のファイ・ベータ・カップ協会のゴールドキーを渡した。・・・父はこのゴールドキーを額に捧げてうやうやしく受け取った。

日下部太郎が死ぬ前年の明治2年3月1日（1869年4月12日）、実は父は日下部に帰ってくるような内容の手紙を書いていた<sup>(30)</sup>。

狛熊勝（林之助）殿から正月はじめに手紙を受け取りました。4・5年帰国しないとのこと、また留学費用が不足し困っているとのこと。お前の留学については「大借金」をしましたが、その返済をふくめ、いくばくかの金を工面し、そちらにも送りましたが、小身の我が家はいまや「大借金之八木家」となり、よそさまからも誹謗をうけるありさまで残念でなりません。事情をよく勘考のうえ、1日も早い帰国を願っています。

日下部太郎の留学は、八木家に多大の経済的負担を強いていたのである。またこのとき父郡右衛門はこの1月太郎の弟次郎・三郎をあいついでなくし、さらに2月藩政の改革のため御使番を免じられ、経済的のみならず精神的にも奈落の底にあった<sup>(31)</sup>。太郎の志を是とする気持ちと裏腹に、帰国を待つ切なる想いがあったであろう。その後太郎の訃報をきいて、妻（太郎の母、おくま）をなくしとしたら・・・、郡右衛門の胸中は察するにあまりある。

## 5 日下部太郎の交友関係

日下部の葬式がおこなわれた翌日の1970年4月16日に、日本人留学生が連名でラトガスカレッジ学長キャンベル宛にだした礼状が残っている。内容はラトガスの教職員や学生が日下部に与えた生前および葬儀に際しての温情に感謝するものであるが、その末尾に次のような13名の名前が同一人の筆跡で記されている<sup>(32)</sup>。

島津（又之進）、丸岡（武郎）、杉浦（弘蔵）、勝（小鹿）、高木（三郎）、富田（鉄之助）、平山（太郎）、橋口（宗儀）、白峰（駿馬）、津田（亀太郎）、林（玄助）、永井（五百助）、児玉（淳一郎）

彼らが日下部の葬儀に参列したメンバーであることは間違いあるまい。横井兄弟の名前がみえないのは、大平は肺を病んで前年7月に帰国、兄の左平太は前年の12月にアナポリスの海軍兵学校に入学し、ニューブランズウィックを離れていたからである。薩摩の松村淳蔵も、1868年カレッジに入っていたが、左平太とともに前年海軍兵学校に移っていた。

この記名者の内訳は、島津・丸岡・平山・橋口は日向佐土原藩（島津又之進は10代藩主忠寛の長男島津又之進忠亮、丸岡武郎はその弟島津武之進純雄、平山・橋口は藩士）、杉浦・永井は薩摩藩士（畠山義成と吉田清成）、勝・高木・富田は勝海舟の息子と弟子（高木は鶴岡、富田は仙台藩士で勝小鹿の従者として同行）、津田・林は肥後藩士、白峰は長岡藩士、児玉は長州藩士という形になっている。このうちラトガースカレッジに籍をおいていたのは、杉浦・白峰・永井の3人で<sup>(33)</sup>、あとの10人はグラマースクールに学んでいたものと思われる。

なおこの直後の4月19日に撮影した写真がラトガース大学に残っているが、富田・白峰・永井の3人を除いた10人が写っている<sup>(34)</sup>。これはマーレー夫人（Prof. Mrs Murray）に贈られたものであることが記されている。マーレー夫人は、後に来日して日本の教育行政に多大な貢献をしたデビッド・マーレー氏の夫人で、当時改革派の教会の日曜学校で日下部の面倒をみていたらしい。日下部の葬儀にあたってお世話になった御礼の意味があったのではなかろうか。

彼ら日本人のあいだに密接な交流があったことは容易に想像できるが、日下部がヴァン・アースデル夫人への手紙に高木三郎の名前をあげて、彼にその手紙を渡すように記しているところを見ると、彼とは一時同じ下宿に住んで、親しくしていたことが推察される。

高木については次のようなことがわかっている<sup>(35)</sup>。天保12年（1841）閏1月17日、庄内藩士黒川友文の長男（名目上は3男）として江戸藩邸に生まれた。後に絶家となっていた遠縁の高木家を継ぐ。安政6年（1859）藩命により軍艦操練所に入学し軍艦修行を行うとともに、勝海舟の塾に入門し蘭学をおさめる。文久期にやはり江戸の洋書調所で英学を学んでいた横井大平と接触をもった可能性も考えられる。この時期大平の叔父である横井小楠と勝海舟は、前越前藩主で政事総裁職として幕政にも参与した松平春嶽をはさんで急接近するのである。慶応3年（1867）7月海舟の家来として当時14歳だった勝小鹿に随行して、富田鉄之助とともにアメリカにわたる。最初はボストンでノースロップについて英語を学び<sup>(36)</sup>、のちニューブランズウィックのラトガースカレッジ・グラマースクールに入学した。明治元年（1868）日本の政変を聞き、勝小鹿を横井左平太に託して富田とともに急遽帰国した。しかし海舟に一喝され、1869年早々アメリカにもどる。横井兄弟との交流を介して、高木は日下部太郎と親しくなったものであろう。下宿も同じとすれば、4人の交流が日本人のなかでもとりわけ密接なものとなっていたとしても不思議ではない。

明治新政府のもとで外務省の留学生となった高木はカレッジには入学せず、外交畑をあゆみ、1872年には米国在留弁務使館書記、1873年臨時代理公使を務め、1874年にはサンフランシスコ副領事、1876年にはニューヨーク領事となっている。この間に彼は森有礼との関係からか明六社の海外通信員になっている。1880年に退官した後は、横浜の生糸輸出会社である同伸会社を興し、明治42年（1909）横浜でなくなっている。69歳であった。なおニューヨーク領事時代に高木は妻須磨子との間にできた1女を失い、そのなきがらはニューブランズウィックのウィロウグローブ・セメタリーにほうむられた。小さな一基の墓が、いまも日下部太郎らの墓が並ぶ入り口に立っている。

もう1人、日下部太郎の最期を看取ったであろう人物、薩摩の畠山義成についてふれておかなければならない。彼は薩摩藩上級藩士の子弟で、杉浦弘蔵と名乗り、慶応元年3月薩摩藩英国留学生のメンバーに選ばれて渡英した。ロンドン大学に入学したが、2年間の英国留学をきりあげて彼が5人の仲間と米国に渡ったのは慶応3年7月のことであった。神秘主義的宗教家であるT・L・ハリスの主催するニューヨーク州ブロックトンのコロニー「新生社」に参加するも、1868年6月にこれを脱退、吉田清成（永井五百助）とともにニューブランズウィックにやってきた<sup>(37)</sup>。7月には松村淳蔵もここに合流し、3人は日下部らとともにラトガースカレッジに学ぶことになった。入学に際しては横井・日下部がフェリスを紹介するなど、仲介の労をとったことが、1868年6月26日

の花房義質あての書簡から読み取れる<sup>(38)</sup>。

当学校の形勢も委細横井両生ならびに日下部らより承り、三兄もいたって懇切に何角のこと教えられ、旁もって幸いの仕合にて御座候。夫より翌々二十一日またまたニューヨークへ参り越し、Dr.Ferris という人物へ見舞、teacher の世話など相頼み申候ところ、同人丁寧極り、すぐさま取りきりて、師直さま世話いたしけれ候にて、New Brunswick 滞学と決定

大学では科学学部で日下部の1年後輩になるが、1870年の秋には古典学部に移している<sup>(39)</sup>。彼はニューブランズウィックの改革派教会で洗礼を受けており、本格的な教育をうけようとする意志と、語学力をもっていたものと思われる。

卒業はせず、岩倉使節団に合流し、帰国後は開成学校の初代校長になり、たまたま再会したグリフィスと草創期の学校運営に尽力することになる。このとき彼は明六社の社員になっている。1876年再渡米し、ラトガース大学から名誉修士号を授与されている。帰国の途次、34歳の若さでなくなった。やはり肺結核であった。

## 6 日下部太郎のアメリカ留学の目的

日下部の留学の具体的な目的については、これまであまり問われずにきた。これについては、後年横井左平太がアナポリスを退学して帰国し、再渡米したときフェリスに送った書簡が参考になるので紹介しよう。1872年12月4日づけの、ボストン近郊のマサチューセッツ州ウエストニュートンからのものである<sup>(40)</sup>。

私をもっと若ければ海軍兵学校に戻るでしょう。祖国が海軍について学ぶことを望んでいるからです。・・・私どもはあなたのお力添えで、アメリカ政府からアナポリスの海軍兵学校に6人までの入学を許され、その後私どもは日本政府からの指名も得ました。当初の計画では、日下部とわたし、そして弟の3人でそこに入るつもりでした。しかし2人は志半ばで他界しました。思いますに、私のような年を食ったものが（アナポリスで）軍実務を学ぶことは不可能です。それゆえ、もっと英語を学んで、軍事システムやアメリカ政府の仕組みを知り、できるだけ早く日本に帰って政府を助けなければなりません。

アナポリスへの復学をすすめるフェリスにたいする謝絶の文面は苦渋に満ちているが、これを見ると、当初左平太は大平と日下部太郎の3人で、アナポリスの海軍兵学校で海軍学を学ぶつもりでいたことがわかる。日下部の最終目標がラトガースの卒業にはなかったらしいことは、彼が父親に1869年の段階で、あと4・5年アメリカで学ぶ意向を漏らしていたことからもうかがえる。

この背景を知るためには、同じころ、越前藩が海外に3人の藩士を送り出していたことを想起しなければならない。3人とは佐々木権六と柳本直太郎そして日下部の父の書面にも登場した粕林之助。

当時佐々木権六は製造奉行の要職にあり、柳本直太郎の方は蕃書調所に学びのちには横浜で外人について英学を修めた経歴をもつところから、柳本は通訳として佐々木に同行したものと思われる。彼らは慶応3年4月に元アメリカ領事館書記ヴァン・リードの手を借りて横浜をたち、太平洋を横断してアメリカに向かった。アメリカにおいては公式に軍務局と接触をもち、陸軍兵制を中心とす

る書類、軍器などの入手・購入や、情報収集にあたっている<sup>(41)</sup>。またニューヨークにおいて、ライフル銃施条機や織機などの購入もおこなっている<sup>(42)</sup>。

もう一人の狛林之助は、家老をつとめる名家狛家の次男であるが、長崎に遊んだ後薩摩藩のたすけを借りて、長州藩士とともに非公式ルートでイギリスにわたり、ロンドン大学で鉱山学を学んでいる。長崎時代から日下部と交流があったようであるが、渡英後のくわしい足跡は不明である<sup>(43)</sup>。

こうした動きは、当時越前藩が積極的に藩政改革を行っていたことと、密接に関係している。一藩の自立、富国強兵にむけて、国際的な知識を求めていたことのあらわれにはかならない。第二次長州戦争が失敗に終わったこの時期、越前藩が期待していたようには幕府は私政改良に動かず、むしろ新将軍徳川慶喜は権力回復にむけて外交権を駆使して主権回復路線をつきすすもうとしていた。越前藩としては、やむなく中央政局からはなれて、とりあえず外圧に対抗すべく、自藩の強化を図るしかない状況であった。しかしそのためには、最新の知識・技術を外国から学ばなければならないことは、十分にわかっていた。日下部太郎の留学も、そうした歴史の大きな文脈のなかで捉えられなければならない。なお、狛はグラバーや長州藩士と同行したが、彼らイギリス留学組と日下部・横井・薩摩藩士らのアメリカ組とは、お互いに連絡を取り合っていたことが確認できる。幕末の最終段階において、国内とは別に、藩のあいだの横の連携はわれわれの想像をこえて進んでいたのである。

## おわりに

本稿は日下部太郎の留学生生活を、できるだけその周りの人々や歴史的背景とともに描くことを心がけてきたが、あらためて日下部に関して具体的に明らかにしえた点をまとめれば、以下のとおりである。

- ①日下部太郎は長崎遊学中、薩摩藩の五代友厚をはじめ他藩の関係者と交流し、内外の情報収集活動を行っていた。
- ②日下部太郎は1867年8月ニューヨークに入り、オランダ改革派教会主事であったフェリスを介してニューブランズウィックに向かった。下宿先は横井左平太・大平兄弟のいた、ヴァン・アースデール夫人の経営する下宿であった。この下宿はチャーチストリート62にある、ラトガースが指定する下宿であった。
- ③日下部太郎は、1867年9月からラトガースカレッジの科学部に籍を置き、2年次からは科学部が改組された科学学部に進学した。ここでは3年間の履修プログラムが組まれていたが、その中でも日下部は土木工学・機械コースを選択した。
- ④日下部太郎はカレッジ入学後にグリフィスからラテン語を教わっているが、それはグラマースクールにおける課外の個人授業のかたちをとるものであったと思われる。
- ⑤日下部太郎は2年次には体調をくずし、1869年夏休みにはフラット・ブッシュ、秋からの最終学年の新学期にはミルストンに移って養生に努めつつ勉学を続けたが、翌年1月からの第2セッションにはカレッジに出席できる状況にはなかった。1870年の4月はじめまでにはニューブランズウィックの畠山義成の下宿に移り、帰国の準備を進めていた。
- ⑥滞米中、キリスト教（プロテスタント）的雰囲気のある濃厚な環境のなかで三年間過ごし、公私共にオランダ改革派教会の手厚い庇護をうけたが、死に臨んでも洗礼は受けなかった。
- ⑦日下部太郎の米国留学の目的は、ラトガースカレッジに学び卒業して学位をとるのではなく、越前藩あるいは日本の軍事改革に寄与することであった。特に海軍の振興を図るべく、横井兄弟と

ともにアナポリスの海軍兵学校への入学を視野に入れていた。

最後に、本文を作成するにあたって参考にした新史料である、1917年（大正6年）6月グリフィスが *The Japanese Student* という雑誌に寄稿した、TARO KUSAKABE, THE FIRST JAPANESE MEMBER OF THE PHI BETA KAPPA（「日下部太郎 日本人最初のファイベータカッパ協会会員」）という記事を紹介して、稿を閉じることにしたい。

日下部家は天皇につかえた家として、日本では古くまた名誉ある家柄である。・・・日下部太郎はおそらく（自分の意志から直接に、あるいは親戚の経済援助を受けてではなく）官命をうけてアメリカにやってきた最初の日本人留学生である。・・・わたしがニューブランズウィックにおいて、最初に日下部太郎に会ったのは1868年の終わりに近いころであった。彼は明治政府の指導者によって選ばれ、フルベッキ博士の紹介で、ニューヨークのフェリス博士を介してニューブランズウィックにやってきた。わたしは彼にラテン語を教え、しばしば対話をする機会に恵まれた。しかしそのときは、やがて自分が彼の故郷に住み、彼の父に会ってファイベータカッパのゴールドキーを渡すことになるとは夢にも思わなかった。・・・一人の若者が知識の殿堂における「情熱的な巡礼者」(passionate pilgrim) になるという思想を体現することはめったにあることではないが、越前の若者がそれをなしたのである。・・・彼は日本が3世紀にわたって世界から遅れをとってきたことを痛感し、それをとりもどすことに全力を傾けた。彼は時間を取り戻した。すべての言語、科学、さまざまな知識を、急いで学ぼうとした。進んだ空気の中に、積極的に身をおき、遊び、そして運動しようとした。それはすべて無駄になってしまった。

彼は命のろうそくを、その両端から燃やそうとしていた。やがて彼の頬からは色が失せ、病的に紅潮した赤みだけが残った。われわれはボードウィン医師に相談した。医師はもはや薬では治らないことをみてとった。そこでわれわれは彼を本から遠ざけ、外出したり旅行することをすすめた。しかし孤高で大望のある彼はそうすることはできず、またしようとしなかった。やがて彼の体力はなくなり、いかなる措置も元気を回復させることはできなかった。死の床で、彼は高貴なる動機から、キリスト教を受け入れることを肯んじなかった。自分の生命の残滓を目の前に差し出された救済者（神）にささげることは、彼の受け入れるところではなかった。彼にとって、仕えるということは君主への忠誠を意味したのである。

われわれは日下部のクラスメイト（後に日本に行き、福井や東京で活躍した M.N. ワイコフがチーフであった）とともに、なきがらをウイローグローブ墓地に運んだ。アメリカ東部における最初の日本人墓地がつくられ、漢字がきざまれた記念塔が建てられた。墓前で埋葬のための言葉が読み上げられる前に、デビッドマーレー夫人が日曜学校の教師をつとめていた改革派教会において、故人に対してキリスト教の儀式にのっとった最高の荣誉が与えられた。寛大な、宗派をこえた立場から、偏見なく慈愛をこめてラトガース大学の学長が弔辞を述べた。ターゲットの記事やクラスがだした追悼文のファイルをぜひ参照してほしい。・・・日本は伝統的には極東、実際にはわが国の西方にあるので、われわれは大日本の仲間に対してわがカレッジのモットーをそのまま適切に当てはめて述べることができる。そのモットーとは、オランダのユトレヒト大学においては1638年 “Sun of divine justice shine on us” 「聖なる正義の太陽はわれわれを照らす」であったが、1770年（ラトガース大学の実際の開学の年に当たる一高木）ニューブランズウィックにおいて、これに「西方をも」という言葉がつけ加えられた（すなわちラトガース大学のモットーは「聖なる正義の太陽は西方をも照らす」である一高木）。

そしてこの1917年、そのままこれをあてはめるかたちで、心からの祈りをこめて、こう言いたい。「聖なる正義の太陽は西方にある最初の国—日本をも照らす」と。

(注)

- (1) 先行研究としては次のものが挙げられる。永井環「新日本の先駆者 日下部太郎」(福井評論社、1930年)、船澤茂樹「日下部太郎」(『若越山脈』第三集、1970年)、「よみがえる心のかげ橋—日下部太郎/W・E・グリフィス—」(福井市立郷土歴史博物館、1982年)、杉原丈夫「二人の留学生とグリフィス」(『若越郷土研究』35の1、1990)、石附実「明治初期における日本人の海外留学」(『近代化の推進者たち—留学生・お雇い外国人と明治—』、思文閣、1990)
- (2) 前掲、船澤論文参照。
- (3) 『続再夢紀事』五(日本史籍協会叢書110、1922年)、239頁。
- (4) 高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』(新教出版社、1978)、123頁。
- (5) 田中啓介『熊本英学史』(本邦書籍、1985年)所収。
- (6) 『続再夢紀事』五、228~239頁。
- (7) グリフィスあてフェリス私信(1905年、ラトガース大学グリフィス・コレクション)  
なお、横井兄弟については、杉井六郎「横井左平太と横井大平のアメリカ留学—オランダ改革派教会宣教師フルベッキの活動—」(『明治期キリスト教の研究』同朋舎、1984年)に詳しい考察がなされている。
- (8) グリフィス・コレクション(まだ仮目録も未完成な段階なので、BOXナンバーなどはあえて掲げない。)
- (9) 前掲『よみがえる心のかげ橋』12頁。  
なお日下部太郎への給費は藩から年100両、のち250両に増額された。1869年には維新政府から公式の派遣留学生として認められ、政府から600両が支給されたが、年平均1000ドル必要といわれた留学費用には程遠いものであった。(前掲船澤論文参照)  
また日下部太郎は松平春嶽によって渡米を命じられたとラトガース大学側の資料に説明がなされている場合があるが、春嶽は実権はにぎっていても当時隠居の身分であり、公式には越前藩主松平茂昭の命によって渡米したとすべきである。これは日本側の説明が不十分であったためと思われる、訂正する必要がある。
- (10) 後述するグリフィス論文参照。
- (11) 前掲、グリフィスあてフェリス私信。
- (12) Rutgers College, *CATALOGUE of the OFFICERS AND STUDENTS of RUTGERS COLLEGE 1867-8* (Newark, 1968)  
この名簿には日下部の住所が、62 Church St. と記されている。
- (13) 正確には後述するようにラトガース大学に1865年に新たに併設されたScientific School(科学学校)に入学している。翌1868年にはこのScientific SchoolはScientific Department(科学学部)と改称され、従来のClassical Departmentとならぶ学部あつかいになっている。なおこのScientific Departmentは当初3年制であったが1871年9月からScientific Section(科学部門)と名称が変わり4年制となっている。なお「科学学校」の訳語は蔵原三雪氏にならったものである。
- (14) New Brunswick NJ, *New Brunswick and its Industries* (1873)
- (15) ランドグラント・カレッジ法・・・これは法案提出者の名前をとってモリル法とも呼ばれる。1862年「生活関連のさまざまな職業における産業者階級を対象とする自由主義的かつ実務的な教育を推進する」目的によって成立した。この法律は科学的農業の発展を助け、当時進行中だった土地の疲弊と荒廃

という問題に対して、適切な処置を施すのに役立つとされる。(F. ルドルフ 『アメリカ大学史』玉川大学出版部、2003)

- (16) Rutgers College, *CATALOGUE of the OFFICERS AND STUDENTS of RUTGERS COLLEGE 1868 - 9* (Newark, 1869)
- (17) 山下英一『グリフィスと福井』(福井県郷土新書、1979年)参照。これについてはすでに蔵原三雪氏からも指摘がなされているが、上記史料を用いていないため間接的な指摘にとどまっている。(蔵原三雪「W.E.Griffisの理化学教養の形成—ラトガース大学科学教育の展開を通して—」『科学史研究』39巻、2000年秋)
- (18) Rutgers College, *CATALOGUE of the OFFICERS AND STUDENTS of RUTGERS COLLEGE 1868 - 9* (Newark, 1869)
- (19) W.E.Griffis, *Journals* (グリフィス・コレクション)
- (20) 船澤氏が紹介された福井市立郷土歴史博物館におさめられている日下部太郎の蔵書は、以下の履修科目のテキストと合致する。
- (21) Michael Moffatt, *The Rutgers Picture Book* (Rutgers University, 1985)
- (22) グリフィス・コレクション (現本は福井市に寄贈されている。)
- (23) グリフィス・コレクション
- (24) 『吉田清成関係文書』三 (思文閣出版、2000) 33頁。
- (25) 同、36頁。
- (26) 杉原、前掲論文。
- (27) 山下前掲書、67頁。
- (28) Voorheers, *The History of Phi beta kappa* (1945), Richard Nelson *Phi Beta Kappa in American Life* (1990), The Phi Beta Kappa Society ホームページおよび *CATALOGUE of the OFFICERS AND STUDENTS of RUTGERS COLLEGE 1868 - 9* (Newark, 1869) 参照。  
 なお日下部太郎がラトガース大学を卒業したとみなすべきかどうかは、判断が難しい。ラトガース大学の卒業生名簿には故人として日下部太郎の名前が見出せるが、卒業試験は受けておらず、管見のかぎり学位であるBS (Bachelor of Science) を授与された形跡はない。学位無しの名誉卒業、というあつかいであったと考えるべきではなからうか。  
 ただ注意すべきは、日下部にとって学位や卒業が大きな意味をもっていたと考えるのは間違いであるという点である。彼が、そして多くの日本人留学生が望んだのは、西欧の学問・知識を形式的にはなく実際に身につけて、日本に帰ってそれを役立てることであった。
- (29) グリフィス『明治日本体験記』(山下英一訳、平凡社、1984) 128頁。
- (30) 「八木家文書」(福井県立図書館蔵)
- (31) 船沢、前掲論文。
- (32) グリフィス・コレクション。なおこのなかで、津田の名前が誤ってK.S.Todaと書かれている。明らかに津田亀太郎静一をさすものであるが、このことから少なくともこの礼状が津田によって書かれたものでないことは推断できる。
- (33) *CATALOGUE of the OFFICERS AND STUDENTS of RUTGERS COLLEGE 1870 - 1* (Newark, 1871)
- (34) ラトガース大学アレクサンダー図書館所蔵。
- (35) 高木正義『高木三郎翁小伝』(高木事務所、1910)
- (36) 塩崎智『アメリカ「知日派」の起源—明治の留学生交流譚—』(平凡社、2001) 108・109頁。
- (37) 犬塚孝明「翻刻 杉浦弘蔵ノート」(『鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報』第15号、1986)、同

『若き森有礼』（KTS 鹿児島テレビ、1983）

- (38) 犬塚孝明「翻刻 杉浦弘蔵メモ」（『鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報』第 18 号、1990）37 頁。
- (39) *CATALOGUE of the OFFICERS AND STUDENTS of RUTGERS COLLEGE 1870 - 1* (Newark, 1871)
- (40) *The Japanese Student* (1918, November)
- (41) 拙稿「慶応期の越前藩政と中央政局」（『近代日本研究』第 16 卷、1999）
- (42) グリフィス『明治日本体験記』（山下英一訳、平凡社、1984）218 頁。
- (43) 拙稿「慶応期の越前藩政と中央政局」（『近代日本研究』第 16 卷、1999）

〔追記〕脱稿後の調査で、日下部太郎が 1969 年横井左平太・松村淳蔵とともにアナポリスの海軍兵学校の入校生に選ばれたが、「身体検査で肺結核と診断され拒絶された」という先学の指摘があることを知った（湯浅照夫「島津啓次郎・その求めたもの」『宮崎県地方紙研究紀要』第十九輯、1992）。著者の湯浅氏は外務省外交史料館やアナポリスの現地調査を行ったようであるので、この指摘の信憑性は高いと思われるが、日下部の研究においては重要なポイントであるので、私なりに今後調査をすすめ事実関係を確認したい。

なお本稿は 2002 年 4 月から 2003 年 3 月までのラトガース大学における海外研修の成果の一部である。